

重修真書太閤記

八編

459  
76



13 特  
門 5  
459  
卷 76

消  
細  
兼

重修真書太閤記八編卷之十六

柴田伊賀守勝豊羽柴筑前守江一味

并筑前守年始禮の事

會  
同  
印  
攻

大谷慶松が反間の計策とハ知ず山路將監が注進  
おより修理進勝家養子伊賀守勝豊を疑ひ内々是  
を除かをやと思ひ立ゆる由を又長濱へ注進する  
者の有るおより勝豊忽お進退の度を失ひ一加  
木下半左衛門徳永岩見守大鐘藤八疋田左近等  
を近づけ如何すべさと相談しけるが半左衛門中  
舟り實をせせバ修理進殿我身の勇氣を頼みて北

大岡記八編卷之十六

越を切崩し上杉の所領を合せてやと望まれしと  
愚ふし云ふ足らず然バこそ難儀の軍小逢とんあ  
れ織田家随一の老臣こそ右大臣家の上洛をも  
知あそぬハ不用心を諫ゆあそは禍の蕭牆の内  
小起りしを聞あがり數日を費し上洛も及  
むれず主君の仇を伐ず御遺骸を埋葬せせずべ  
て御無念をかさあふと筑前守いられし所更  
おすさまあし其上近きところ三七殿と心を合て  
小谷の御方を迎取あふハ何ぞぞや右大臣家のお  
ましますところ申あひく叶ふべしと思しうら  
申させあふべきお申あそぬハ叶ふべしと思ひ知

あふが故あるべし然らば右大臣殿のおちま  
ぬを時としく氣隨お事を行ひあふ匠作の心中と  
萬事右大臣家の御為とのみ取行をひあふ筑前守  
と日を同し云べけんや此方様の御事ハ長濱を  
預り領しあへり長濱ハ近江の國小して安土と程  
近し安土ハ右大臣家の御遺跡たる三法師君の御  
居城あり三法師君と同一国に住めひく然も近  
境あり親しくあふと御誤と申べ加らず三法  
師君の御後見あり時を違へず出仕する筑前守あ  
りそれと音信せさせあふと何ぞ御事と誰ハ云  
せん是ハ御与力の山路將監めら何しまさお北庄

大司巳八編卷一六

一りとるを真寶ぞと聞あふての御結構と覺へ  
早く三法師君の御前の御首尾を整へあひかつ筑  
前守と睦しくありあふべくと存け左の遠加  
り匠作と筑前守と合戦及びせん時此方ハ  
三法師君の御方人として匠作の方へも筑前守の  
方へも御援兵あるまどく然バ匠作より負あふ共  
柴田が御家ハ相違なく相續あるべくは是一旦ハ  
父子各別ありと不孝の如く聞へ共始終  
の孝行と存けと憚る所ありけれバ徳永石見守  
聞もあへず煮く山路が神谷と謂ひつるともゆし  
先ごろ大谷慶松が長瀆へ来り我等と五六時昔今

の物語く酒のみ樂しむとるが嫉さ小北庄へ  
つるあふべ匠作ハ氣の早くく然も思慮淺き  
人あり必定遠く討手を差向りるありんと  
かほへ後れ臍をかむ共何の詮くべき一刻  
由早く筑前守と同心く安土へ御出仕へべと  
勧めりバ勝豊由決心先使者を山崎安土とへ  
立とりり筑前守ハ勝豊の使者に對面匠作の  
名代として勝豊安土へ出仕有べとの儀真寶小  
道理至極致く早く御出仕有べくは雪と道  
開心とらん時匠作由御出仕由是又畏入の御老  
体と深く感入はとく使者小鞍馬小袖黄金

を賜り伊賀守へ来国光の刀小黄金三百枚兩  
家老以下与力の衆へも夫々大刀脇指黄金白銀  
長持幾棹入り入る送りこゝまらハ伊賀守を始め  
何れも不思議ある大将哉と云ぬ者こそ無りは  
れ斯て天正十年も暮ま及びはるま築前守に禁中  
の御歳暮を勤め三法師君の名代とる由を奏聞し  
自分の御礼をト上攝家宮方清華の歴々諸公家の  
面々何れも残る所なく回勤し黄金絹布板の物  
綿錢其程々も随て是を贈りはるまよりりる乱  
の世をから最樂し三年を迎ふる嬉しさま打寄く  
羽柴築前守に凡人あらりと噂ふ夜をも更しはる

一書小天正十年十二月廿三日築前守安土へ参  
上し三法師君に歳暮の御礼をト長谷川前田と  
相議し禁裏へ鳥目壹萬貫黄金絹綿を献上す  
とあり

築前守ハ山崎寶寺を打立く天正十一年正月元日  
播州姫路へ到着し二日ハ家中の礼を受けられ其  
後酒宴を催ふし軍忠の者を賞しはるま都く百六  
十餘人ぞありはる三日旗本諸士領分諸寺諸社の  
礼を受く後家中諸事を沙汰し終るとそのま枕  
を取く母ぬハその息吹百千の雷の如く如何ハ  
驚くせ共勤起かるとあく四日の夕方漸目を悟し

直に供揃へ山崎へ至り禁中宮方諸公家へ年始  
の進物を取と、のへ六日未の刻に京著し六條本  
国寺を仮の休所とあり七日の未明に参内しいつ  
の如く關白殿下以下を礼し一礼を勤め淺野彈  
正少弼長政を京の所司代とあり大津坂下の両城  
を与へり長政今年卅八歳あり筑前守八日ハ  
京をうち立大津に至り船のり鳥川より上陸し  
安土へ参向し九日三法師君へ御礼の次第進物の  
數をさと都く右大臣家御在世の時聊かりたる  
とあり其後長谷川前田よりハ定めて岐阜清  
洲より年始し御参向ありらん幾日あり有しや

りんと問ひ前田より長谷川より否左様のとハいはず  
と云然に歳暮の御参向ハいかと問ふは  
をすと答ふ筑前守不審氣ある面持し  
清洲より岐阜より若君の御叔父あり此御城よりハ故  
殿の執し思召つる所あり常ふ御入りて敬殿の  
御在世を忍び且ハ若君の御成長を喜ひぬらん  
真實の御本性あるべき歳暮より年始し御越  
あさ何事ぞと頻小落涙ありけり其  
使者を仕立く清洲岐阜をとり柴田龍川の面々  
へ歳暮年始し安土へ早々参上有べきありを  
觸りぬる小清洲の信雄ハその性質柔弱ふ

決斷おこし人あれば此觸を聞く大小驚き折や一病  
小依く延引老つれをすされはる小岐阜の信  
孝の大憤り幼君御相續のち信雄信孝二人を  
御後見小立るといへ共万事筑前守一人く取  
賄ひ柴田瀧川等の老臣へ評定お申及ばざる由あ  
れば某おと後見の名りりく其實ハ無り如し然ハ  
安土へ申参るとあく京都へ申出仕せす然るを今  
安土あり如是觸来るハよさしく筑前が所為と思  
これより筑前何者ぞとぐめを云へば故殿の御草  
履よりあり何ぞ我等へ對しく如斯かめくおこ  
を取行ふを更にお返事お及ふべかりずとを怒られ

らるが猶腹を居かひひく諸老臣を呼集り筑前  
が無礼を誠め沙汰せられ有べかりず早々清洲糸  
名北庄へ牒し合せ切上りつべしと下知せられ  
しりら平田壹岐守國分佐渡守峯信濃守三人以の  
外お仰天一御憤りさるとあがり左様お怒々おこ  
軍立ゆく筑前守の御向ひゆせ、筑前が旗本あぐ  
申切入と加こくべし其故如何おと申當国大  
垣の池田勝入齋父子岩村の稻葉伊豫守入道一鐵  
父子郡上の遠藤伍馬守いづれ申無二の筑前守方  
ふり近江國あぐ丹羽五郎左衛門勢田の山岡みあ  
筑前守と睦しく此方より御出張ゆ先き山岡丹

大岡已八編卷一六

六

羽小取切られ後を池田稲葉遠藤小せりつめられ  
ゆそ、由々志難儀たるべしその上柴田ハ路次  
阿くくゆて四五月ごろ迄ハ出陣ありやましくゆ  
瀧川ハ心中たのりありず清洲ハ御軍ぶり如何  
小由鈍くハ今少一期をまごせぬひて御謀らひ有  
べし由をやはる小より信孝も怒を挿へく出陣の  
沙汰ハ及びぬを松と鎗術者岡田三郎右衛門杉  
原麻右衛門守の各人佐垣九助深谷源太郎羽根左  
京進など云浪人を多くかくえぬひはる由筑前守  
入置し忍び共早々ハ注進しとり志りハ筑前守  
これを聞さ申有べし猶も能々聞糾して注進

九月廿一日

せよとぞ下知せらる  
三七信孝朝臣籠城三臣諫言の事  
并筑前守秀吉濃州表發向の事  
三七信孝朝臣筑前守を討滅さんとり上洛はるべ  
しと怒られしを三老臣一同ハ諫しはるハ筑前守  
幼君を補佐し奉ると云を以て當屋形ハ對し奉り  
無礼の條御怒ハ御尤ハ御共是を咎めぬハ人爲  
小切く上らせぬハ御思慮足さる小似てハ其故  
如何と申小秀吉三法師君を主君と仰き奉りつれ  
ハ上ハ朝廷をとりめ奉り下ハ畿内近江播磨美作  
備前備中のりのよでとく秀吉ハ從ハ靡さてハ

大司巳八扁卷十六



ハ當屋形御出馬ハハ忽々朝敵の名をとらせ  
あひ次ハ御父君の御遺跡ハ向う家督を争ひあふ  
といそれあふべく是第一の損とてべく次ハ當国  
の内々ハ大垣の池田父子岩村の楢葉父子郡上  
の遠藤あんどハ當御屋形の催使ハ役ハハまど御  
出陣ハハ直ハ御跡より切て上り幼君三法師君  
ハ忠節を竭さんかとえ岐阜へ攻めりゆり左  
ハ後陣を襲ひてハ是第二の損ハ次ハ當屋  
形の御勢もづかハ美濃半国ハハ只今御加勢ハ  
べき柴田殿ハ雪ハ阻られ急々の出陣ハハ東ハ  
瀧川左近殿ハ御縁者ハハとませ共長島素名の

門徒共内々念み中題目ハハ容易ハ御出張ハ  
まどく是第三の損あり然らハ筑前守ハ安  
土を本城とて番場醒ハ井河とりまど出張ハ  
べく左ハハ平場の合戦ハ元ハハこれハ  
落合ハハ當節御出陣ハハとて以て然るハハ  
ずハ云ハハより三七殿ハハ上洛ハハ思ハ  
止ありハハ共筑前守ハハ来りハハ歳暮年頭ハハ出  
仕延列ハハとて定ハハありハハ討手ハハ向  
そのハ開ハハさかんと云ハハ然ハハ但ハ家僕ハハ等  
ハ筑前守ハハ急状ハハとてめハハと餘ハハ云ハハ口惜ハハ  
早く越前ハハ早馬ハハ立勝家ハハ出陣ハハの期ハハ定めハハ又勢州

大関已八編卷十六

へ使者をつかして後援の手筈を極め當城ふとく  
籠り然し筑前守が便宜を待んと云れしかば三  
老臣も諫めあひ此上ハ御説小役ひやべいとく指  
葉山の城ハ國分佐渡守隆常團平九郎正景岡本  
土佐守貞就を大将とく三千餘人瑞龍寺山の砦  
小ハ織田新八郎信兼これハ七兵衛信澄の弟あり  
平田壹岐守秀胤峯信濃守頼近を大将よして五千  
餘人岐阜城小ハ齋藤玄蕃頭稻葉兵部大輔庶伏免  
右京亮岡本五郎左衛門親田彦左衛門佐垣九郎左  
衛門親原彦右衛門以下宗徒の侍七百餘人その勢  
一万餘人三七殿の御旗本より二の丸三の丸の門

門櫓々を請取堀の上小ハ搔楯かき門外小ハ逆茂  
木引さ偏小合戦の用意を多路次の切所小ハ新  
関を居へ往來を改めしハ三七殿籠城の企あり  
由筑前守方へさこへたり筑前守ハ兼てより三七  
殿北畠殿を怒らせ事を起させむやと謀りつる小  
北畠殿ハ怒り氣もあくおめくと病小より延引  
の由をアこれにる小三七殿ハ筑前守の計り如  
く大小怒られ上洛し筑前守を打果さんと軍兵  
を催ふしあひしを老臣等が諫めゆる小よりて其  
事ハ思ひ止ありあひし共共怒免角小解やらず  
終小持城小人數をこり道路小関を居へ謀反の色

を顯しめひかへ岩村郡上大垣より注進晝夜櫛  
の齒を引が如く筑前守これを知りて大に驚き急ぎ  
安土へ出仕し三七殿謀反を企てぬ由たりか小  
うにぬきをりて定めぬこれへ寄ぬふありんその  
用意有べくゆ蒲生父子をそぐり丹羽五郎左衛門  
尉あどひ悉く當城小御入りて幼君を守護し奉り  
るべし筑前美濃路へ出向ひ軍仕るべしとて直小  
番場の峠を打こし増田仁右衛門杉原七郎右衛門  
を使とて三七殿謀反を企て幼君を危ぶめ奉る  
と君ふの御存知の御事小やと清洲におありぬ信  
雄の御許へ申入る小信雄より三七殿とハ

睦まじかりすこの次は三七殿を攻倒し岐阜を合  
せむやと思われかば諸國の浪人岐阜へ寄せ集  
ると何ぞ小やと心元なく思ひつる小三七陰謀の  
催しゆよりはるとと知れり急ぎ馳向ひそのと  
いもご強大ふありざるうち小踏つぶすべしと下  
知しぬへ筑前守より諸將へ北畠中将殿の御せ  
あり岐阜の三七殿謀反しぬへりいそぎ若君の御  
方へ参上し北畠殿の御下知小舟て軍功をせげむ  
べし由を觸るるゆあり羽柴美濃守秀長蜂屋出羽  
守頼隆筒井順慶中村孫平次一政堀久太郎秀政石  
川備前守貞清仙石權兵衛秀久をとりぬめ其勢都合

二萬餘人先陣ハ醒井泉のりあゝ小陣を取バ大垣  
の池田父子岩村の稲葉父子郡上の遠藤いづれも  
打々出筑前守の手お馳加ハリ軍忠をいとさんと  
そ専途と寄たりかハ筑前守の勢母とく虎の風  
を起し龍の雲の乗が如く夥しおんど詞の述がこ  
く先陣既ハ長柄川を打てこ近邊を放火しはれ  
バ岐阜稲葉山瑞龍寺の城々の際みる焼野とあり  
く伏を置べさ便ひ筑前守稲葉一鉄おまひ右京  
亮貞通池田勝入齋同紀伊守之助遠藤大隅守を  
く瑞龍寺山の城ハ向えせ羽柴美濃守秀長丹羽五  
郎左衛門長秀蜂屋出羽守頼隆ハ稲葉山を圍ませ

筑前守総軍を以て岐阜小向ハ遠々小陣を取急  
小寄んとせす是ハ三七殿不義の企りりと云共  
右大臣家の御子より幼君の叔父君あり情なく  
これを討込さんと宜しき理とも思へハ三七殿  
思ひ返しあハ計りうべき旨りりと云く敵の意  
を勤りし志を一つよせざる様子をかりとりはる  
又播州より山崎宝寺それより京都安土岐阜まで  
の際をハ淺野彌兵衛黒田官兵衛荒木平太夫より  
廻り運送の路を通し高山右近太夫素山修理木  
下將監生駒甚助羽田長門守一柳市助等ハ甲賀蒲  
生の山々より石津多藝の峯つとひ小勢州一切く

入べき勢を奪ひにる小付瀧川左近将監これを  
氣づりいたすく岐阜の加勢小打立んとせす  
一益筑前守の大軍岐阜を圍むよきさゝく歎息  
一さくゆく氣の利たる男りか一益をどが及ぶ所  
小ぢりぐ何事も我等が思ふより二里も三里も  
行越しく事を計るぞや今の体小くハ三七殿も北  
畠殿も筑前が奴とありあふべし柴田が討れんと  
も遠りり余過てりくと大息継ぐぞ居たりにる  
勝家ハ岐阜籠城のこをさくより卑の如き筑前守  
あり猶豫せば後悔すべしとく佐久間玄蕃を呼  
近づけ先陣とありられバ佐久間よろこび打立ん

とにる小折し由日々雪降と二三尺終ハ山由  
峰由只一面小埋みをくりバ如何小猛くもやる  
共歩路断る往来あり玄蕃怒て百姓むりを駈け  
路をひりりせにる小終日降雪去まりあり三尺  
作れバ六尺埋まりにる小より横紙チぶりの玄蕃  
名もろされそきてぞ居たりにる  
一書小織田三七郎信孝岐阜籠城ハ天正十年十  
一月の事と云羽柴筑前守美濃国小至り大軍を  
以て岐阜を遠巻小ありにる小より三七信孝氣  
臆し勢屈し秀吉小就て和平を請しバ秀吉こ  
れを許しそれより江州長濱小至れバ柴田伊賀

守勝豊父小をむひく秀吉小降参す十二月廿三日  
秀吉安土小いり終小播州小歸とへり  
又云岐阜より江州安土小至る廿四里小近く越  
前北庄小至る三十八里小遠く道阻しく大  
垣へ墨股佐渡の二大河を越て九里小近く岩村  
へ二十里小遠く勝山の道峻わして岐岨川深  
郡上へハ十二三里と云ども路次り  
又云筑前守御影寺小陣を取り長柄川小をふく  
小彈正長屋赤石長瀬の邊小いころまぐ諸勢を  
回し晝夜を云ず處々小く鉄砲を放させ関を  
げし母ど小岐阜の樹木小ひびき合てよおすさ

あはくさこえく加バ城中の老若男女肝を消し  
昔ハ墨股の砦小ありて柴田と功を争ひし木  
下藤吉郎そのうちこの稲葉山を攻とりし由藤  
吉郎今もさあふ来くるれくをくるむると  
のうらむさよと云く泣かぬとあり

重修真書太閤記八編卷之十六

六月巳八編卷十六

一三

[Faint, mostly illegible handwritten text in a large rectangular frame]

重修真書太閤記八編卷之十七

柴田龍川出張延引の事

并三七殿詐て和平を請るゝ事

岐阜侍従信孝朝臣ハ一旦の怒ゆまかせ上洛し

筑前守を打果さんと軍兵を催促ありはる小平田

壹岐守秀胤國分佐渡守隆常峯信濃守頼近これを

諫めはるゆより其事ハ思ひ止まりあへども馳集

りはる軍勢等の手前面目ありとや思われん然

ハ籠城し筑前守が寄来るをまつべしと稲葉

山瑞龍寺山ありび小岐阜本城小楯籠る総勢二万

許お及びつべし羽柴筑前守ハ兼くかくあるべく  
 謀りつるをあれハ少中騷がす舒々と軍勢を引率  
 三七殿の味方計りて三法師君を迎取とや有  
 んと思案しつるゆより蒲生丹羽の人々を以て  
 これを警固し奉り次ハ信雄卿ハ訴へ其下知を奉  
 じ濃州へ進發すこれ信孝ハ謀反人と云共正し  
 く右大臣殿の御子あるが故ハ筑前守これを攻る  
 主とありぬハ清洲中将信雄の命を以てこれハ  
 三法師君ハ叛く罪を正す然ハ數万の軍兵何れ由  
 筑前守を推尊んぐ上將軍とあすと云ども秀吉之  
 小盾とあく我ハ三法師君の御手代とあり清洲の

仰小後ふりのありと云て諸將小下りれしハ諸  
 將いよく其徳ハ懐き陣中整々として其旋を守り  
 ばる小より稲葉山瑞龍寺山岐阜小楯籠るところ  
 の勢ども朝ハ旗旗の出る日ハかくやくを以て  
 軍勢の日々小加さむを知り夕ハ小の篝のかずの増  
 小就くはふの参加の新あるを計る味方を見れハ  
 今日ハ昨日ハ負減り次第く小心も細く成つれハ  
 それこハあり小氣もつめ勢ども自然退屈氣  
 小ぞ見えおれり況や近隣ハ放火有りて我方様の  
 家ハ焼れ関のこゑ鉄砲のひびきハ長夜の眠をこ  
 まく加之かゝるより密ハ契約しつる諸侍衆由



つゝ心加りり〜筑前守の手小馳加もり〜由  
旗馬印のありをれ然とゆと思ふ柴田ハ雪深く  
〜人数を出す道ある龍川左近将監ハ三七殿  
の妻父あり素名と岐阜と隣国ありて其路近け  
れ共大垣の池田父子の支へられ容易く出張〜加  
〜と〜是〜延引〜とりま〜岐阜の城中益  
々便を失ひはるゝあり國分土佐守嶺信濃守あど  
さへかくてハ籠城をかくま〜り餘りハ兵氣の  
衰へぬうちハ一方便せぬハありべかりずと思案  
〜本丸の番頭ありはる齋藤玄蕃頭稲葉刑部少輔  
を呼居て中はるハ殿の血氣ハをやらせぬ餘り

切り上りせぬハ筑前守を討果〜天下を御心のま  
まおあ〜ぬと仰りるハ小あり夫こそ短慮と  
トべられ暫時容子を伺ひぬハ龍川柴田以下ハ力  
一味の衆を集り其上小〜筑前退治するべくハと  
中せ〜ハ然ハ籠城〜筑前守を城下ハ引よせ  
龍川柴田ハ後巻させ両方より引挾で攻〜りハ筑  
前ハ加ハ猛〜共前後の敵ハ困〜る降を乞〜べさ  
りのをと仰られ〜ハ夫を由成トと諫か〜一且  
ハ仰のありハ籠城〜ハ〜ハ只今かくの如く  
筑前守ハ攻つめられ城下の在家を焼拂をれ熱〜  
約束の諸將すら多くハ敵ハ加〜り〜ハ龍川柴

田の後巻より外小頼あさところ柴田ハ雪小路を  
塞みぬ龍川の池田父子ゆ支へられいづれも出張  
延引せりかくく日々小所々を焼れぬど小幾許の  
損小てゆ上城中の兵氣を疲りゆ事味方の為小  
此上ゆあさ痛と存ゆ各々の心を以て殿小秀吉と  
一先御和平りて筑前守の軍兵を引上させ其後  
北國の通路開けゆころ再度打て出られゆサノ小  
御す、免有べくゆとヤられハ齋藤も稻葉も元よ  
り左思ひつるよとよく一議小ゆ及はず領掌信  
孝の前小推参しとヤれるハ殿小ゆ定めて知名ゆ  
つべし筑前守の出馬思ひしよりゆ神速あるゆへ

人数ゆかひく積りし三倍ゆゆ及び其上近隣の城  
持御旗下ありゆる者何れも寄手ゆ馳加をりゆへ  
ハ當方ハ志を通しゆ無二の面々さへ路次を閉止  
られ未ど一人ゆ参加仕りぬ柴田ハ雪深くしと一  
人立の路さへ自由ありぬゆへハ後巻の目どいつ  
共定かさくゆ御縁者の龍川殿ハ筑前守が手の者  
伊勢國ハ乱入せんと扱しゆ江州の山々路々を  
さし塞ぎ幾万と云數ゆ知ずゆゆあり今小一手の  
出張ゆゆ及むず筑前守日々夜々御城下の近隣ま  
で押寄来り放火仕ゆ今ハ籠城のゆの共の家屋敷  
大かこ焼失せられゆ今五六時を経ゆりゆ御城

大正言ノ終卷十一

下迄由寄来り焼拂ひつべし然る時ハおのづと  
加より易く頼みおこさ人情おけへ返り忠の者  
由出来ゆらん左ハ一定御大事お及びハ  
んと存ゆ因り来等が思案仕ゆハ詐て筑前守お  
御和睦ゆ寄来りハ勢共を引退させ其後北國の  
道開けの時分佐久間柴田佐々の輩と能々御約束  
ゆ不意お江州へ打り出られ安土を乗取三法師  
殿を御味がお召置せられ却て筑前守を攻られハ  
ハ誰ハ三法師殿を捨奉り筑前守お荷擔仕り  
ゆべし只今筑前守の勢お強くゆ全く筑前守一  
人の上おゆせず三法師殿の御方お召れハハし

昔足利尊氏將軍山門中向く軍一おひはるお幾度  
とあく打負おひ剩九州までお落下らせおひし  
持明院殿の院宣およりく軍を進めおひはるお忽  
お打勝おひく終お天下を一統おひはる然  
ハお加おゆして江州へ打出安土の城お入おひ三  
法師殿をこあへ御うつし其後筑前守と軍  
をおしおえり必定御勝利たるべくゆ然ハ何とお  
く筑前と御和睦あるべくゆとせしハ信孝お  
由此際心中お深く恐怖しおあ処おれハ景然るべ  
しこハ思おれしおれ共平田國分峯おどく心中を  
懸おひたしおある返事をいおしおを及稲葉刑部

大正言ノ終卷十一

大段言ハ多ク一七

少輔あさひりりるハ何さま御家僕とる筑前守  
小園れあひ共ヒわく和睦を請あふと喚か御無  
念小思名べられ共足利尊氏卿も高師直小園られ  
めひーとゆ何條御恥辱とりべきと再三理を盡  
しく諫めーかバ信孝小も納得り何れ小も三人  
の老臣共と評定の上とさされはふ小三人の者も  
異存あさ由を返答ーられバ庶伏免右京亮を使と  
しく丹羽五郎左衛門の方へ和平のとをり入りれ  
ける小五郎左衛門能々これを聞紀ー口状の趣小  
相違なくハ筑前守小ヤ談ぶべき由を固く押返ー  
らる小右京亮聊以て異儀多由を答へらる小よ

り五郎左衛門筑前守の陣中へ至り庶伏免ガヤセ  
ーまを告げる小筑前守これを聞心中小柴田瀧  
川の後援延引せー小あり和平のとをとり結び我  
人数を引のけさせ四月の初小至り柴田を引出ー  
無二の一戦をせん為と早くも悟りーかハ五郎左  
衛門小向ひ元より三七殿小對ー遺恨もあくハ  
ハ御首を給てるべくとハあけくも思ひ設けずハ  
此程小くー筑前討く捨むやとの御結構小ゆへ  
近々と参扣仕りのみ三七殿の左様小思召替さ  
せめ小秀吉何とく別儀を存りべき三法師殿并  
小清洲の中將殿とくも餘儀もーよさんとの思ひ

大月巳八編卷十二

六

大陰謀の巻

よりPさげ何れあも三七殿御後悔との御工おゆ  
ハ岐阜御座あも三法師殿の御連枝の公達を  
安玉へ入させあふべし左ゆハ秀吉神速お引  
退さすべくゆと答はるを聞て五郎左衛門大悦  
ひ鹿伏免右京亮を呼よせ筑前守の中せし通りを  
Pあしあハ右京亮引返しその趣を三七殿あけ  
れハ信孝あも五郎左衛門ハ左中ハ共筑前守  
勿々一應おさハ承知すおとさりのと思をれしあ  
思の外早く事ありしあハ三老臣と共ハ大悦ハ  
れ筑前深慮ありとあもさハ聞しが又謀ハ易  
かりりりと城中一同ハ後の方が便を工夫し當座

の恥辱を忘れり筑前守ハ三法師殿の弟君の岐  
阜おましあを機づかひはるハ今速ハ和平し  
連枝の君達を迎へ奉る上ハ岐阜を攻るハ心易し  
と心中ハ笑を含み万事ハ五郎左衛門ハ任せり  
羽柴筑前守濃州表陣拂の事  
并佐久間玄蕃允伊賀守を讒する事  
岐阜城中ハ三七殿ハ平田國府峯齋藤裕  
業以下うち寄る鹿伏免右京亮を待つ丹羽五郎  
左衛門ハ返事の趣を聞後ハありハ只今籠城の苦  
をのがれんとの嬉しハ何れハ子細ありまこと  
ハハ齋藤玄蕃頭進み出くハハ三法師殿

大陰謀の巻

二

の連枝の君達ハ幼稚ハくいと縹緲のうちハ  
おもくもせ共正しく三位中将殿の御二男あり此  
君を事故なく迎へ奉るを悦びて筑前守和平の  
を承知せしと及えたり然ハ此方ゆく筑前守を  
謀り課せしと思名共筑前守ハ又當方を謀り課せ  
しと思ふらん然る時ハこの和平遠かりすく破  
るべし因く當方ゆくも萬事早々とあされく御油  
斷なく御計畧ゆべく存けしと云々ハ三七殿ハ  
始く心舟ありし今更連變ハ及ふべしハ中より  
ハ約束の通り幼稚の君達並ハ傳保人まで残り  
なく五郎左衛門の陣所へ鹿伏免右京亮ハ付て出

奉りしほどハ五郎左衛門謹で迎奉り筑前守の  
陣所へあくと通し去々ハ筑前守御迎ハ参り若  
君をバ直ハ安土へ入奉り筑前守ハ其日御影寺の  
本陣を引拂ひたり

此若君と云ハ後ハ織田左衛門佐秀則とす從  
四位下ハ叙し侍從ハ任しありあり入道し  
宗爾と云寛永二年十月廿七日四十五歳ハ卒  
す法名拾松寺英嵩雄公といふ息女一処あり小  
笠原因幡守長武の室とありあり此若君の母ハ  
近江國多賀社司の女あり此年十八歳無双の美  
人ありにるハ中将殿二條ハ戦死の後岐阜の

在所まゝの忍しのびりりゆるを三七さんじち殿どの迎むかへとりあひひ  
 あり筑前守ちくぜんのかみこのとを傳つたへ聞き一目見ひとめみをやと思おもハ  
 此こゆるゆより和平へいの題だい目め此こ若君わかにきみを出いしぬへ  
 とりゆるあり若君わかにきみ今年ことし二歳ふたさいあり  
 大垣おほがきの池田いけだ勝入かついり齋父さいふ子岩こいわ村むらの稻葉いなば入道いりだう一徹いつてつ父子ふし  
 郡上ぐんじやうの遠藤えんどう大隅守おほむすのりを筑前守ちくぜんのかみの本陣ほんぢん呼よ迎むかへ今度こんど  
 速すみ出陣しゅつぢんの功こうを賞しょうし猶なほ又また和平へいの本意ほんいを詳つひ論ろんし  
 各々おのづか休やす息やすあるべしとく領知りやうちくへかへされり  
 大垣おほがき御影ごかげ寺てらの間ま小埴こはぢを築つその間まく小柳こやなぎを植うえ  
 平常へいじやうの時ときハ洪水こうずいを防ふさ事ことある時ときハ逆さか茂木もぎ小加こか  
 へ又またハ時ときとく堤つゐの内うちへ川水かわみづを切き入いるれハ

面めんの湖水こすいとあすへく思おも慮りし築つ初はつめし由よし土人どじん  
 の口くち碑い今いま存ぞんせり  
 瀧川たきがわ左近さこん将監しやうかん一益いつやくハ岐阜ぎふの沙汰さたを聞きといへども  
 筑前守ちくぜんのかみの奇兵きへい小おどろかされ長島ながしまその外ほかの一揆いつげ  
 ども出陣しゅつぢんの跡あと小素名すななを襲おそえんとを氣きづかひ且かつハ  
 大垣おほがきの池田いけだ小半途おほなごを討うれんとを危あやふし出陣しゅつぢん延えん引えん  
 日々ひひ小岐阜ぎふの摸様もくさうを案あんし居いたりゆる所ところへ三七  
 殿どのより飛脚ひやくかく到いた来きしつれハ何事なにごとあや急いそぎ状箱じやうばうを  
 披ひらきらる小筑前守ちくぜんのかみと和議わぎ整ととのひ筑前守ちくぜんのかみ軍兵ぐんべいを退ひき  
 れハ今いまハ心こころ安やすくゆとあしれし一益いつやく讀よ終はつりて眉まゆ  
 小皺おぢよせ不思議ふしぎあると加かる筑前大軍ちくぜんたいぐんを起たし岐阜ぎふ

大月己八編巻一

を圍みあかり何の色ふりもかく和平して引退き  
 一といかぬいぶか一萬一播州もど小異變の  
 や起りりんと思案一つ飛脚を呼寄せいか岐  
 阜おく和議をい何とくあつ聞たるをハ無やと  
 問へば飛脚の足輕かこまり下臆あれバ委しき  
 王ハ存せぬ但君の安土へ御入いひしを我々  
 まぐも御残りをしく存いとりりるおより一益色  
 をみく何若君ハ安土へ御入りしと云くそれハ  
 真實々一定りと云バ飛脚何偽をすべき若君并  
 母御料傳保等まで一人も残りぬ御越いとりりる  
 時一益立上り持とる扇を取落し泣然として辞を

一やりりる饜まで奸智の長猿冠者め嗚呼口  
 かーや三七殿も我等も遠かりず彼奴が門お膝を  
 屈めんそのくやーさよ如何おせんくと涙を流し  
 て立とり居たりりの狂をさまで見えたりと  
 や然りとく和平といを此儘お為べかりずとて  
 郎等二三人使お仕立筑前守の旅宿へ遣はし岐阜  
 ぬく左やうの仰られぬ我等式何條異儀をすべ  
 き初の如く懇お通しむむん懇お御中へと云  
 せられバ筑前守より別儀存せぬとすりるおよ  
 り美濃伊勢近江ハ平均お親しとるお見えぬけ  
 り筑前守安土へ参上し三法師君の御機嫌を伺ハ



れその次小岐阜の若君小御目見え一附々の人々  
 小對面一前田入道長谷川丹後守小面會一いよく  
 油斷あく万事小心附けへこり沙汰一々京都へ引  
 廻一はるさるり長濱の柴田伊賀守ハ筑前守の誠  
 心を聞安土へ参上一三法師君を尊崇一奉るべく  
 思ひつれ共病中るれハ其事もありは服薬一鍼灸  
 保養小日を送りはる所へ越前より脚力を馳こ  
 筑前守岐阜を圍み三七殿難儀小及びあふ北庄の  
 人數をさ一向んとする小雪深く路塞りとりそれ  
 よりハ便宜もよ一急ぎ出張一々筑前守の後陣を  
 取切けへと下知せ一かども長濱よりの道も伊吹

山かろ一をけ一はれハ関の玉川雪小埋りれ勿々  
 た中及く通ふべくもあ一伊賀守病氣以の外あり  
 とく出陣もせさりはるを勝家所せ一及伊賀守ハ  
 大病あり共家臣も有り與力も有りそれ等をよづ  
 打立せ三七殿小力を合すべさ小遅延せ一條行事  
 ぞやと老さり小疑ひ思ひはる所へ佐久間玄蕃兄  
 をせ来り修理進小中せ一兼てより伊賀守ハ一定  
 謀反とすくゆひ一を盛政ハ偽と御用ひあくゆひ  
 一其証跡た一加小露れくゆ其故ハ伊賀守ハ  
 妻子眷属ハ云小及バす近習の者の妻や子まで丸  
 岡小置けひ一を忍びく小長濱へ迎へ取くゆ其由

承をりいれと直に途中に待受一二人名捕ていとして  
勝家の前小引居とり宗徒のいのおハハをいもど由  
丸岡小置へさりのを北左へ無沙汰小長濱へ移し  
いハ謀反小非ずし何とら思すとアハる小より  
勝家大小怒り悪さ伊賀守が振舞加ふ然ハ早々呼  
寄打て捨んと罵りあかり縛置とる二三人を片手  
打小を打捨とり玄蕃かしとめ左中ノ小手荒さ御  
心也へ加中りに人小ハ計られぬふし能々御心を  
志づえられ謀を定め然し後小御本意を遂り  
べし伊賀守筑前守と心を合せ丸岡小置の妻子従  
類を呼取い上ハ長濱をよく取回めいと思われ

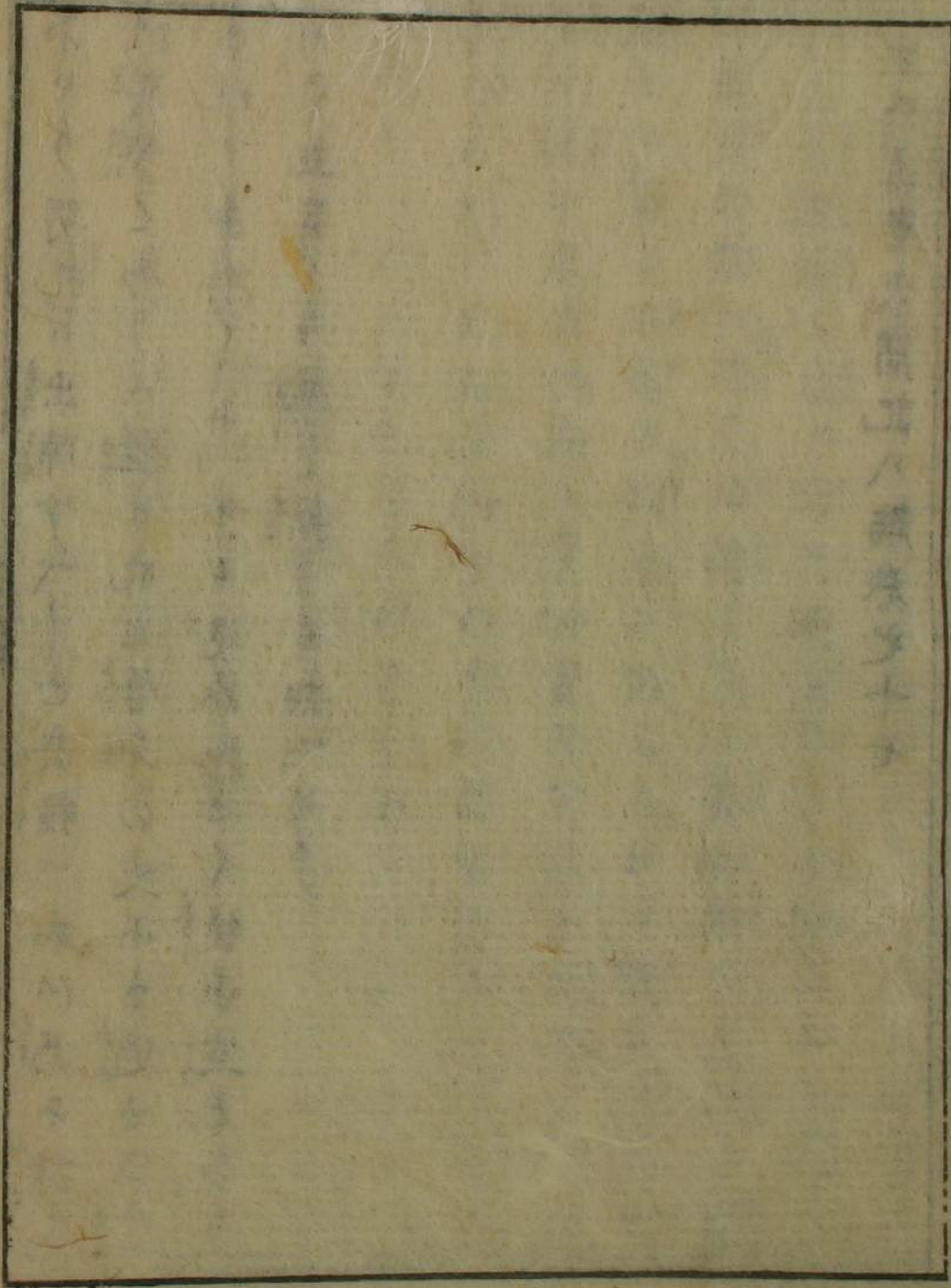
去かれハ急小名よバれハ共何とく早々小相越し  
べき定めし修理殿よりかきしつとくいありと筑前  
守へ相談しその上小く何とく返事を越すべく  
い必呼せぬふ共すぬ中ノ小参りアありと若又  
討手を差向けぬハ柳ヶ瀬木の下雪吹小道の  
凍い人馬の往来た中ノかからず日を経るうち小  
長濱へハ筑前守の加勢阿るべく是毛を吹て疵を  
求る道理ありとアあり然る上ハ玄蕃が異見小  
任すべし如何小し伊賀守を止ほすべしやと問  
小より玄蕃答て中中ノ今度岐阜と筑前守と和平  
し濃州より京都へ引返す由あり志かれハ筑前

守を追掛る為と云五六百人の人馬を以て押行  
べし長濱近く成つ共只筑前守を追掛ると披露せ  
ば長濱の者ハ決して油断すべし其油断を見澄し長  
濱ハ一宿し不意ハ城中ハ切て入るハ筑前守の加  
勢ハ援け来るべかりず伊賀守をさハ討取らば  
家臣与カハ元より御手のりのど申ありそれ等々  
つ及をバゆるされぬのどくめしつ及それいべ  
しとすく免しハ勝家りつと申くしと同心し  
そのまゝうち立んと志はるハ折あし山風おろし  
さく雪をば降来り東西も己かぬまゝ志ばり  
おむしと滞留しはるうちおその夜もいつし更

ふりり明れハ出陣すべしと兵糧つかひ馬ハ林ハ  
ハ義勢ハありハ猛りれと吾身の丈ハも過とる雪  
あれハあかくハ一歩も進みかたく徒ハ空をみり  
めく立ちながら拳を握りて扣へり

重修真書太閤記八編卷之十七

大正十年八月...



重修真書太閤記八編卷之十八

三七殿勢州勢を催ふ一再籠城の事

并伊賀守勝豊病死の事

天時を察し地理を考へ人和を計るハ兵を用ゆる  
大要しとい人々口小唱ふれ共是を心小會得て  
者鮮し抑天時とい何を云遁甲の九星八卦八門  
あり九星とい何々ぞ天蓬天芮天衝天輔天禽天心  
天柱天任天英あり八卦とい坎坤震巽乾兌艮離を  
云八門とい休死傷杜開驚生景の八を云天正十年  
十二月の天時を考ふる小筑前守の住する山崎室

大正十年八月...

寺より濃州岐阜ハ良ハ當る然レバ岐阜より室寺  
ハ坤ハ當れリ坤ハ乙奇ノ泊スル所也  
門ノ空位あり乙奇ハ天中ノ主也  
群忌者禁ス  
べク乙奇を避るといハ筑前守自然と天時を得  
とリと云つべし筑前守ハ濃州ハ打出ルハ江州ハ  
すべク筑前守ノ尊崇一奉る安土ノ御領又ハ無二  
ノ味方とる蒲生山岡丹羽ノ領地也  
且湖上運  
送ノ便利を專ルす濃州ハ入るも大垣岩村郡上ノ  
味方あり是又地理ハ應ずと云べし筑前守三法師  
君を奉じて正嫡正統ノ家督を定め  
凶君尊靈ノ追  
福ハ財宝を吝み  
不於て丹羽五郎左衛門尉

長秀池田勝入齋父子中川瀬兵衛高山右近大夫塩  
川伯耆守堀久太郎細川兵部大輔入道稻葉一徹蜂  
屋出羽守遠藤大隅守等ノ諸將いづれもこれハ服  
一これハ志也ハひらひて補佐ノ上將軍とあり  
又よく朝廷を敬礼一奉るが故ハ主上ノ勸慰ハ合  
ハ大臣卿相これヲ礼一これヲ重んぜりる次ハ民  
を安く一商賣ノ路を開き乱妨狼藉を嚴一誠  
沙汰するを以て四方ノ人民争ふ  
筑前守ノ来  
をまつこれ所謂人和ハ非ずして何と云ん  
和  
すレバ天地也違ふと能はず然るを況や天役ハ  
地應ずる不於てをやさレバ筑前守ノ向ふところ

敵をさぐ如し柴田瀧川の輩ハ悉くこれ小反すと  
云へ共自思ひ自改むると能はず却て自傷ひ自破  
るけごと天地人の捨る所と云べし神戶侍役信孝  
父の命を以て出て神戶の嗣とあれり何ぞ入て父  
の遺蹟を争ふべけんや諸侯の子の人を養むる  
りの多し若其祿を争ふる養父の家を捨るりの  
り誰れ誰れ是を可と云ん誰れこれ小与するりの  
らん柴田ハ織田の宿老あり信孝思ひ立とありハ  
是を諫むる小正道を以てし右大臣殿の御心小叶  
をむべし然るを如何ぞ此人をそののあり却て  
天下の亂を起さんとすると殆大臣の職とあすべ

あらず信孝の斬り抱へあひし諸浪人共ハ興  
と小思ひつる籠城も和議とありし何の仕出  
る小無さを本意ありし思ふあり和議ハ一旦  
の御計畧ふのよし既小北國の道も開けり早く  
柴田へ御手合をやり通せられ瀧川殿へ御約定  
て御籠城へあし筑前守打て出れし我々御先手  
を受取加の猿冠者を只一擧小打果し御運を開  
せられく天下の將軍と仰せ奉らんと遠かりすと  
勸めし程小元より思慮をさ三七殿あり血氣小を  
するあり然らば柴田へ使者を遣ハすべし瀧川  
へハ誰こそ然らぬかと評定ありはるところ小織

田新八郎信兼信孝の書簡を偽て柴田へ和睦ハ暫  
時の計策あり早く出張するべく此方ゆく初の  
如く籠城しハハ定めて筑前此方へ向て出陣ハ  
べし其時青野原ありゆく合戦し追つ返すつり  
ちりゆ内中柴田勢ハ長濱へこみ入り夫より安土  
へ馳入三法師殿を取奉り勢を引分け一手ハ番場  
醒ヶ井ありて押出して筑前守の後を断その内  
中柴田ハ京へ打上り筑前守が私曲を奏聞しあふ  
べし然バ天下を取ん五月の内を出どりこりたるを  
勝家あつと遠慮をさ者あれハ一議小由及はず領掌  
四五日の内中軍勢を催促しよづ長濱へ出張す

べしと返事ありしハ信兼大悦び信孝の前  
小出く再度籠城すべし由を勧めり抑この信兼  
と云ハ明智が婿の七兵衛信澄の弟あり信澄丹羽  
五郎左衛門尉が為小討れし時三七殿丹羽小手を  
合てゆハ信兼三七殿を怨みつる意あるさハハ  
りゆとも信兼一人しゆく三七殿を討んと又容易か  
りゆハ無念をかり三七殿小従ふく有はるが此騷  
さを時としゆくかくハ計りしあり筑前守ハ和睦を  
取結び三法師殿の弟君を請取て帰京せし加とも  
美濃尾張伊勢若狭越前ハ放置しりし者の負をバ  
元より猶多く入しりしハハ件の國々の容子日々

大月巳八編六一八

小かちゆあく聞えり然れハ三七殿の結構諸浪  
人等の沙汰信兼が計畧すべく筑前守これを知と  
り加共三七殿も勝家も筑前守より間者を入置  
はると知ざりはるこそうたぐり信孝ハ勝家が  
返書の趣を聞と其よ、兵糧を取入れ矢玉を用意  
一向籠城の支度をあし城の四方の道々を堀切  
木の根竹の株を立並べ人馬の足を妨げんと構へ  
らる修理進勝家ハ伊賀守が逆意を誡め其後長濱  
の仕置を糾し然安土へ出仕し幼君の御機嫌を伺  
ひ奉るべき旨を披露して北庄を出立せんとあし  
去々共去年の九月迎へとりはる小谷の方の色ハ

迷ひ一日々々延引あはるこそ傾城傾國の古  
例と知れられ長濱の伊賀守ハ養父の嫉妬偏執よ  
り正統の三法師君ハ出仕せす却く是を廢し他  
家を相續しあひし三七殿を押し立て織田殿の遺跡  
とせんと計るとの正理ハ叶はざりふとを辨へ  
筑前守ハ一味し柴田の家の永續を謀りはるハ病  
氣日ハ添てさし重り今ハ世ハ憑すくあけハ見え  
とりしところハ北庄の修理進この長濱へ来る由  
をさし、いさ胸塞り心地惱ましくあり二月中旬  
終ハ身まかりふさ生年廿六歳まよハ惜りさ齡あ  
り筑前守ハ此由をさしさくハ修理進一定長濱へ



来る者らん先んずれば人を制し後るれば人を制  
せらる茶田が出張せざる前ふと一ひ濃州へ討  
て出三七殿をかひずり瀧川ゆ小物思をせむや  
とく近國の大名等を田文を以て催あしむる小馳  
集るハ誰々ぞ高山右近大夫長房塩川伯耆守國滿  
蜂屋出羽守頼隆中川瀬兵衛清秀山岡美作守景隆  
堀久太郎秀政筒井陽舜坊法印順慶長岡與一郎忠  
興羽田長門守義真小川土佐守氏之赤松次郎則之  
同弥三郎則村伊藤掃部助栗山修理亮大田垣金石  
衛門山内猪右衛門一豊木下勘解由左衛門尉同將  
監泰高小寺官兵衛尉孝高同吉兵衛長政波多野五

郎作秀時中井修理進宗善長谷川十左衛門清宗以  
下宗徒の人々七十餘人都合其勢三万五千とぞ注  
志はる筑前守著到披見し夫々小面會しやはる  
ハ先達て三七殿三法師殿お對し野心を挟み居城  
小楯籠られは聞清洲おあします中將殿おその由  
訴ていひし小筑前罷向ひ其音趣を問糺すべし音  
仰られは小舟て旁と共小濃州へ罷越てはハ御  
誤りの由堅く被仰出は事面々もたし加小知あふ  
べし然る小未ど一年も過さる小又御籠城有て諸  
浪人を名抱へあふと更小其意を得ず必竟ハ茶田  
瀧川あごり中勸めりとはと覺えは三七殿小未ど

弱年小あしあは思慮分別も定まりぬをば三法師  
君の人あみ小弓矢を取ぬふあま三七殿を安上小  
移し参らせやべく存心各々ハ何と思われぬぞや  
と云れし加ハ何れも尤然るべしとぞ答へたる筑  
前守られを聞て然バ打立人々とく羽柴美濃守秀  
長を大将とし三好孫七郎秀次を副將軍として其  
勢二萬三千餘人美濃路をさし出張す大垣の池  
田岩村の稲葉郡上の遠藤多藝の氏家あどハ國境  
お待りけ或ハ便宜ゆよりて直小岐阜へ向ふべし  
とぞ定めりり又池田ダ臂ありける森武藏守長一  
も同し美濃守の手小つささめさつれく發向

ありされ共猶不足ゆや思われりん筒井と山内猪  
右衛門尉太田垣金右衛門以下七千餘人を重めて  
濃州へ差向ぬふ

美濃守秀長岐阜の城を圍む事

并三七殿越前へ援兵を請ぬ事

三七郎信孝朝臣ハ瑞龍寺稲葉山岐阜本城と軍兵  
を三所小籠て寄手遣しと待かけぬ然る小寄手  
ハ森武藏守長一遠藤大隅守氏家常陸介以下七千  
餘人ハ稲葉山へ向ひ池田入道勝入齋父子稲葉入  
道一徹父子木下將監以下八千餘人ハ瑞龍寺へ向  
ひ羽柴美濃守秀長三好孫七郎秀次山内猪右衛門

一豊筒井順慶赤松次郎則之同弥三郎則村以下一  
萬七千餘人ハ岐阜を圍く関を作る前隊後隊次第  
を亂さず騎馬武者歩士武者順序を正し風雲鳥蛇  
すそまの備整々として嚴重小こそ見えとりけれ  
信孝朝臣ハ追手の擗お上り寄手の陣を見こころ  
五色の吹ぬさお瓢とんの馬印ハ羽柴筑前守の本  
陣ハ相違あり今度ハ城方より切あがり有無の一  
戦をと血氣ふまかせく逸りあひられハ新参の浪  
人ども何れも興あると思ひくお得りのを取て  
大将の前お立つすぐお打出んとありあひる所  
へ稲葉刑部少輔馳来り三七殿の鎧の袖をひかへ

てりけるハ只今打出あそと近頃御短慮と覚え  
其上お寄手の陣中を伺ひ見ゆ本陣ハ五色の吹  
貫瓢の馬印を立て昔の羽柴筑前守おハ左  
も有つべし今ハ近衛の少将お昇進し朝廷の  
公事を奉行し天下の政務を補佐する身あり軽々  
おく此邊まで出張覚束なく存付ゆより能々探  
り糺してゆへハ美濃守秀長が秀吉おかたり寄  
てゆあり秀長が陣お駈向をせめひく何の詮ゆ  
べき真お猪武者と世上お取もやされあハんと然  
るべかりん今お志む敵の形勢を御覽ゆくさて  
後お御打出ゆべしと諫められバ信孝お由秀吉

あらぬ秀長と聞てさしめ勢ふも似す然ハ只今  
打出るとハ思ひ止るべしとて元の櫓へさしり上  
り寄手の様を伺ひぬ秀長の旗本ふてハ城中  
より只今打出るあらんと見しところハ左も無ハ  
如何あるとサリんと疑ひ陣中を様々小穿議しけ  
るぬこの一兩日何処の者とも知らぬ水汲夫りり  
らるが此曉より在処を知らず必定城中より間者  
小入し者あらんと推量しつれども思ひ知ぬさま  
しく居たりぬハ又陣中へ火繩賣の夫出来りと  
り秀長これを見て近習小目加しく搦り取り厳く  
責問ども初ハ尾州清洲の町人と作と答へるが

何あり小強く責られ苦さあり小是ハ指業刑部少  
輔が足輕おろけが寄手の陣中の容子を知らんと  
めお出し立られぬしと云然ハ此程の水汲夫も汝  
の同類おやと問いかお我等と同僚おいと答ふ  
秀長これを呼近舟然ハ汝を放し返すべし城中お  
返りて汝が主の刑部お云へ此程打出ぬをあらん  
と見てぬ小水汲夫小教へられ御出陣延引ありぬ  
ふ由おゆ今又御足輕を火繩賣小御仕立ぬ陣中  
へ御遣ハしより當陣の一二くさく為見ぬ  
これを軍師おて御打出ぬべし秀長も城中の次  
第を探り知る方便を覚ぬと洩さすせとく出

ナリはれバ刑部少輔くもく問尋めて良久ち  
案しりはるハ城中お寄手より入置しりのあるべ  
し誰おや有ん彼おやと互お心を置合裡お城中自  
然お睦しあらずありにりり是只秀長一言およ  
りて忽胡越の思をあさしむ元より筑前守が得と  
る反間の術とハ云りの、怖しありにる謀あり筑  
前守是等の始末を聞とり重ねく秀長お下知しけ  
る様軍勢の内お勇氣おをりし城を責んと云者  
あるべりれ共秀吉存ずる旨りれバ指番あさお城  
へ向て矢一筋お射べかりず只時を絶さず関の  
を上げるとたし加お越はれバ秀長これを守り

かごとく諸手お下知しく拔掛を制しはれバ城中お  
ても却て退屈のいろを顕せしりり爰お森武藏  
守ハ稲葉山へ向ひにるが本陣よりの指番あるお  
より只関の声をりげて空炮を放ちにるお城中お  
てハ誠お攻ると思ひ違へ齋藤玄蕃頭慮伏免右京  
亮城戸を開て突て出る武藏守ハ此際軍おせだ少  
し退屈の処あるお少おとえらるる駈合せ鋒より  
火花を散して戦ふとり城中の侍も寄手も共お美  
濃の勢あるお互お恥かハし一足も引お引くと  
揉合し加お由寄手ハ大勢あり荒手を入替攻立し  
りバ城兵終お切負て引色お見えにるおより岡本

五右衛門稻葉新六郎踏止りて鎧を合せその間  
小齋藤庶伏免ハ城中へ入岡本稻葉猶由手搦く戦  
ひ一加バ寄手由た中へ打あけり相引小引分  
れはるふより老づくくと岡本稻葉打連て城小入城  
方五十九人討死し手負ハ百五十四人と加や寄手  
小由四十六人ハ討れり百三十餘人ハ手を負ひ双  
方牛角の軍多れ共城中へハ援加ハる勢由あり寄  
手ハ日々小参加の多くして手負由討死由更小目  
小立ずこれより後ハ城中小くも用心さびしく大  
將の下知あり小討出べかりずと隊々小之を制し  
られハ寄手由又みどり小攻あけりず只遠巻して

日を送りける処小筑前守ハ勢州へ打出瀧川左近  
將監の持城を責つり合戦家中の由聞へりふよ  
り城中以の外小周章し平田國分峯の三人打寄評  
定しるるハ真小左様ありハ勢州より當城の後援  
ハあるありさきより若瀧川切負よりハ其勢由乗て  
筑前守當國へ寄来るべきと必定あり秀長由從て  
當城を圍む勢由三萬餘人と見つりし小秀吉伊  
勢を切平らぐ爰小寄来りハ又二三萬の勢あるべ  
し早く越前へ此由を告知りせ勝家の援を引出し  
秀長を追拂ひるハ如何小秀吉猛烈し共瀧川を棄  
て秀長を助くべし其時瀧川柴田前後より揉合ひ

大目已八編卷十八

當方中居て手いさく戦ハゞ筑前守兄弟を打取  
んと何の子細り有べきと云飛脚を越前へ遣  
そ一勝家告れれば勝家牙を咬んで大に怒り猿  
冠者め先をせられては瀧川ハ能も老ぼれ  
と云三七信孝のぬく若どの何と云軍の進退を  
しめふべし勝家向をぐ叶あどと云鎧を取て肩  
投あり上帯まめり馬に乗らんと云一はる 処へ小  
谷の御方を一り出こハ何処へ向ひあふぞ猿冠者  
とハ秀吉のてふや志そ一待せぬ一寂期の鼻むけ  
仕らんと鎧の袖小すありあふより勝家馬小も  
乗あひたせとひはる 処へ鉦子土器りち来り酒宴

小及び一バ打立んとせ一軍勢も何されをてく  
ぞ見えゆりありる 処へ岐阜より早馬をせ来り  
羽柴美濃守の勢三萬餘人稲葉山瑞龍寺岐阜の三  
城をとり圍み攻つめり 処へ筑前守二萬八千の勢  
ふて伊勢の國へ打出瀧川持の城々を攻め厚ど小  
左近將監力を盡し防戦してはひつれ共敵ハ目  
餘る大勢あるうへ兵糧運送の便よく味方ハ折  
あ一無勢ある小土地の一揆むり時を得て爰あ  
こ小蜂起の色を立るふより瀧川以外の難波の体  
小ゆ勿々以て加勢の兵を出す小道あくゆ早々御  
出馬有りて筑前守と有無の一戦有べくゆと告

六月己未編卷一

かハ勝家<sup>かつや</sup>の、後<sup>あ</sup>れより我<sup>われ</sup>筑前守<sup>ちくぜんのかみ</sup>小先<sup>さき</sup>立て打<sup>う</sup>て出<sup>で</sup>  
筑前守<sup>ちくぜんのかみ</sup>が伊勢<sup>いせ</sup>美濃<sup>みの</sup>へ打<sup>う</sup>ち入<sup>い</sup>らんとする<sup>し</sup>処<sup>ところ</sup>をうつべ  
かりにる<sup>り</sup>の<sup>を</sup>既<sup>すで</sup>に<sup>あ</sup>く<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>我<sup>われ</sup>軍<sup>いくさ</sup>如何<sup>いか</sup>  
で<sup>り</sup>勝<sup>かつ</sup>を<sup>を</sup>得<sup>え</sup>べ<sup>ん</sup>や<sup>さ</sup>ざ<sup>ざ</sup>筑前<sup>ちくぜん</sup>勢<sup>せい</sup>州<sup>しゅう</sup>小<sup>こ</sup>向<sup>むか</sup>ひと  
り美濃<sup>みの</sup>守<sup>のかみ</sup>岐阜<sup>ぎふ</sup>小<sup>こ</sup>向<sup>むか</sup>ひと<sup>さ</sup>く<sup>く</sup>志<sup>し</sup>り<sup>れ</sup>バ我<sup>われ</sup>長<sup>なが</sup>濱<sup>はま</sup>より  
江西<sup>きせ</sup>小<sup>こ</sup>向<sup>むか</sup>ひ<sup>り</sup>都<sup>みやこ</sup>へ打<sup>う</sup>ち入<sup>い</sup>り筑前<sup>ちくぜん</sup>山<sup>やま</sup>崎<sup>さき</sup>の陣<sup>ちん</sup>を<sup>と</sup>り<sup>き</sup>  
その<sup>の</sup>一<sup>ち</sup>安<sup>やす</sup>土<sup>ち</sup>小<sup>こ</sup>向<sup>むか</sup>ひ<sup>て</sup>三<sup>さん</sup>法<sup>ぽう</sup>師<sup>し</sup>君<sup>きみ</sup>を<sup>と</sup>り<sup>ま</sup>奉<sup>ほう</sup>る<sup>べ</sup>い<sup>そ</sup>  
げ<sup>や</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>下<sup>げ</sup>知<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>傳<sup>つた</sup>へ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>用<sup>もち</sup>意<sup>い</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>い</sup>に<sup>る</sup>を<sup>を</sup>佐<sup>さ</sup>  
久<sup>く</sup>間<sup>ま</sup>玄<sup>げん</sup>蕃<sup>ばん</sup>元<sup>げん</sup>を<sup>を</sup>せ<sup>ま</sup>り<sup>て</sup>盛<sup>せい</sup>政<sup>ま</sup>が<sup>や</sup>せ<sup>と</sup>ころ<sup>ハ</sup>爰<sup>こゝ</sup>  
あ<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>叔<sup>お</sup>父<sup>ちち</sup>君<sup>きみ</sup>の<sup>の</sup>落<sup>お</sup>つ<sup>き</sup>過<sup>す</sup>ぎ<sup>あ</sup>ふ<sup>ふ</sup>よ  
り<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>後<sup>ご</sup>手<sup>て</sup>小<sup>こ</sup>向<sup>むか</sup>ひ<sup>り</sup>あ<sup>へ</sup>り筑前<sup>ちくぜん</sup>が<sup>た</sup>り<sup>り</sup>爲<sup>な</sup>る<sup>る</sup>小<sup>こ</sup>向<sup>むか</sup>ひ<sup>せ</sup>ら<sup>れ</sup>

んと遠<sup>とほ</sup>から<sup>ら</sup>ド<sup>ド</sup>口<sup>くち</sup>を<sup>を</sup>一<sup>い</sup>や<sup>や</sup>く<sup>く</sup>とい<sup>い</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>か<sup>か</sup>ど<sup>ど</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>せ  
ん<sup>ん</sup>方<sup>かた</sup>あ<sup>あ</sup>一<sup>いっ</sup>刺<sup>さ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>早<sup>はや</sup>く<sup>く</sup>長<sup>なが</sup>濱<sup>はま</sup>あ<sup>あ</sup>打<sup>う</sup>ち<sup>す</sup>あ<sup>あ</sup>や<sup>や</sup>と<sup>と</sup>す  
む<sup>む</sup>れ<sup>れ</sup>ど<sup>ど</sup>勝<sup>かつ</sup>家<sup>か</sup>と<sup>と</sup>小<sup>こ</sup>谷<sup>や</sup>の<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>方<sup>かた</sup>の<sup>の</sup>別<sup>わか</sup>れ<sup>れ</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>  
み<sup>み</sup>出<sup>い</sup>陣<sup>ちん</sup>延<sup>えん</sup>引<sup>けん</sup>小<sup>こ</sup>及<sup>およ</sup>び<sup>び</sup>に<sup>に</sup>る<sup>る</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>是<sup>ぜ</sup>非<sup>ひ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あ<sup>あ</sup>

重修真書太閤記八編卷之十八

大目已八編卷之十八

十三



